





## 鷹觜テルの 最初期の研究教育活動

—岩手県における栄養学の展開と  
女性研究者の進出をめぐる試論として—  
海妻径子（岩手大学人文社会科学部）

1



## いわて女性研究者のパイオニア、 鷹觜テル（1921～2000）

- 岩手大学初の女性助教授（1946年。1970年の教授昇任が女性として最も早いかどうかは、記録未整理につき未確認）。
- 栄養学研究に生涯を捧げ、1961年には小柳達男（岩手大学農学部教授から東北大学農学部へ転出）との共著論文がNature誌に掲載。同年、岩手医科大学より医学博士号を取得。
- 生活改良普及事業および女性向け社会教育（いわゆる「婦人教育」）を通じた、女性の地位向上・エンパワーメントへの寄与
- とりわけ僻地における、実践的な、子どもの栄養改善指導。後年は「長寿村」研究を通じての、ある種の（商業主義的）近代化批判

2

## 鷹觜テルの研究教育活動 ：4つの時期とその背景



【最初期：小学校訓導の傍ら研究開始】1940年～戦中における

- 女性の動員と「プロメテウスの娘たち」
- 「有夫女教員問題」にみる岩手の女性の状況
- 栄養学の転換：成人男性対象から子ども対象へ

【初期：調査指導の確立と実践】終戦～1950年代における

- 総合的「生活科学」の試みと挫折：生活改良（善）普及事業と農業改良普及事業、家政学と農学、栄養学と医学…
- 「未完の革命」：農村女性のエンパワーメント

3

【中期：研究円熟期】1960年代～1970年代初頭における

- 学童・妊婦への健康診断と栄養指導のサイクルの確立
- 狭義の研究論文や、『家庭の生活設計』（1968）に代表される各種テキストの量産期。

【後期：批判的総括期】1970年代半ば～1990年代における

- 近藤正二（元・東北大学衛生学講座教授）や古守豊甫（医師）らと共同での「長寿村」研究  
⇒ 「短命村」の食生活改善から、雑穀や海藻など「長寿村」の伝統食における、食物繊維やミネラルの摂取状況へ、関心の以降

4

## 女性の動員と 「プロメテウスの娘たち」



- テルは大正10（1921）年に現在の岩手県江刺市に誕生、岩谷堂高等女学校を経て、岩手県女子師範学校を昭和14（1939）年に卒業、愛宕小学校訓導となり、翌年に国立栄養研究所主催の「全国栄養教育発表会」に参加・研究発表。
- 1920年代その1：中学校・高等女学校の拡大および「普通教育」化の進行。岩手でも実科女学校の高等女学校への転換が相次ぐ（岩谷堂高等女学校も実科女学校から昭和元/1926年に転換。同年には水沢や一戸などでも同様の動き）。岩手の中間層女性に高等女学校→女子師範→小学校訓導、というコースが普及拡大か（後述の「有夫女教員問題」も参照）。

5



- 1920年代その2：北大（大正7/1918年設立）や理研（大正6/1917年設立）で女性を副手や嘱託等の資格で採用開始。ただし基本的に無給  
⇒ 栄養研究所（大正9/1920年設立）でも高鍋千代が嘱託で勤務、論文発表
- 水沢緯度観測所（明治32/1889年創設）では大正12（1923）年以降、胆沢郡立実科高等女学校（のち水沢高等女学校）出身者などの女性を主に「計算係」として採用。国立天文台となった昭和63（1988）年までのあいだに採用された所員309名中119名は女性だったという（馬場2018）。

6



- 1930年代：文理工科大学の設置と、その入学資格における女性への「門戸開放」（昭和4/1929）。その背景にあった女子大学昇格運動。中等教育の「普通教育」化の進行により、「実業的」専門学校として発達してきた師範学校に対し、（アカデミックな意味での）高度専門化が求められた。  
⇒ 良妻賢母主義の公式的堅持と齟齬をきたす、女子師範大学をつくらないための、妥協の産物（湯川2003）。のちに戦局が深まると、昭和12～16（1937～1941）年の教育審議会での女子大学創設をめぐる議論へ（石渡2020）
- 昭和8（1933）年の弁護士法改正。昭和13（1938）年には3名の女性弁護士誕生：「職業婦人」の増加や家族・相続問題への対応（湯川前掲）。

7

## 「有夫女教員問題」にみる 岩手の女性の状況



- 東北帝国大学女子学生入学事件（大正2/1913年）時の総長・澤柳政太郎の女教員観：「女子の体質並に性情」から、女性には小学校教員の職は最もふさわしく、その大多数を女性にすべき／一家の柱とならなくて良い女性は、薄給の教職においても一意専心に職務に尽くせる／男性に較べ女性は給与が低くて良いし、そのような女性を教員に増やすことで、財政的な余裕をもたらす…等（乙訓2010）。
- 大正10（1921）年、原敬首相が市町村教育費の整理削減方針を発表⇒澤柳は野口援太郎らとともに帝国教育会等の組織を通じて、小学校教育費の維持を主張、（既婚者も含め）女教員の存在を擁護（齋藤2014）

8



- 岩手における教員初任給の男女格差は、全国的にみてむしろ低めだが（1920年調査で全国平均3.3円のところ岩手は3円：女性20円/男性23円）。男女とも教員給与水準は全国最低レベル。
- 帝国教育会は大正5（1916）年に「女教員中有夫者数と独身者の数につき各府県の調査」を実施。回答のあった33都道府県のうち、岩手は女性教員の既婚者比率が49.13%で全国2位の多さ。1位は富山県、3位は徳島県で、岩手を含むこれら3県は男女の教員給与水準が全国最低レベルである点で一致（齋藤前掲）  
⇒教員同士の共働き夫婦が多かった？

9



- 帝国教育会は大正6（1917）年に「第一回全国小学校女教員会議」を開催、「有夫女教員問題」について当事者の意見集約を図る。参加者した調査委員の中に、猪原クニ・阿部アツ（盛岡市教育会）、和田トキノ（岩手県教育会）の名前あり（齋藤前掲）。
- 岩手県教育会『岩手教育』昭和7（1932）年7月号には、同年開催された教育研究集会「小学校女教員協議会」の記録（中心参加者は尋常高等小学校訓導）。また昭和15（1940）年の同誌には「女教員理科協議会」特集号あり。渡瀬典子（2015、2016）は、昭和12～16（1937～1941）年の岩手県小学校連合女教員会による「家事裁縫研究紀要」教育実践記録を分析。  
⇒昭和に入ると女性教員のみで教育研究集会が成立する状況であったことがわかる。

10

## 栄養学の転換：成人男性対象から子ども対象へ



- 「第一次欧州大戦の経験から（ドイツが「カブラの冬」の飢餓とそれによる暴動により、「戦闘に勝って戦争に負けた」ことを指すか？「銃後」が栄養学の対象へ）」内務省保健衛生調査会が、栄養研究所の設立を内務大臣に建議。大正9（1920）年、国立栄養研究所設立（所長・佐伯矩）。
- 翌10（1921）年には岐阜県恵那郡川上村小学校での全校給食を指導・実施。大正11（1922）年7月25日～8月7日には、各地方長官推薦の高等女学校教員53名を集めて、第一回栄養実務講習会を開催。同年8月14日～17日には東京朝日新聞社主催の「栄養料理講習会」を開催

11



- 大正12（1923）年、関東大震災。近代日本最大規模の民間人被災者を生む。日赤の児童収容所など震災孤児への対応。
- 大正13（1924）年、佐伯が私財により栄養学校を設立。栄養士制度を構想。同年、日本給食協会も設立される。
- 大正15（1926）年、栄養研究所技師・原徹一が国際連盟交換研究員として英国シェフィールド大学に1年間の留学。欧州の学校給食制度を視察研究する。
- 昭和6（1931）年、凶作と農村恐慌。原徹一が中村不一技手とともに、翌年東北6県での栄養調査と食生活改善指導を実施。昭和9年（1934）年に東北大凶作が起こると、再び実施。

12



- ・「故原博士より依頼されて「岩手県の農村地帯に於ける凶作時の栄養疾患」について調査したことがある」（鷹觜テル「岩手県に於ける農村の栄養学的研究」『岩手大学学会学部研究年報』1951年）
  - ・栄養研究所は戦中は海軍や満蒙開拓少年義勇軍の給食制度づくりにかわり、原徹一は昭和21（1946）年に死亡。
  - ⇒原への調査協力は、テルが愛宕小学校訓導になった昭和14（1939）年、および国立栄養研究所主催の「全国栄養教育発表会」に参加・研究発表した昭和15（1940）年の直後か。
- なお、鷹觜テル展で展示している原の抜刷「東北の凶作と栄養問題」（昭和10/1935年）には、岩手県の調査地として九戸郡山形村が挙げられている。

13



- ・昭和16（1941）年に、テルは論文「凶作とう歯の関係について」を『家事及裁縫』15巻8号に発表、翌年には文検合格。
- ・『家事及裁縫』（昭和2/1927年創刊）は、近代的家事教育研究誌（いわゆる「主婦向け雑誌」ではない）の草分けであり、文検の受験情報誌の役割も果たした。15巻8号には岩手出身の小澤エイの論文「主食物と蔬菜の計画栽培」も掲載。
- ・井上えり子（2009）の文検合格者へのインタビューには、テル以外の岩手出身の合格者の回答が掲載。
- ⇒不合格者も含めれば、岩手の女性教員のあいだに一定の文検受験志望者層が形成されていた可能性。

14

## 総括



- ・全国的な潮流でもあった中等教育の「普通教育」化
  - + 市町村の財政基盤が弱い岩手ゆえの既婚女性教員の動員
  - + 農村恐慌・東北大凶作を契機とした学校給食制度・小学校女教員による栄養改善・指導の試験的かついち早い普及
  - = 岩手における女性教員の向学心の一層の喚起
  - ⇒「いわて女性研究者のパイオニア 鷹觜テル」の誕生

【今後の課題】テルと同世代の岩手の女性教員、栄養研究所技師・原徹一および彼が東北で実施した栄養調査・指導の、詳細について調査

15

## 参考文献



- ・馬場幸栄「国際緯度観測事業を陰で支えた岩手の少女たち 一知られざる科学の歴史一」『比較日本学教育部門研究年報』第14号、お茶の水女子大学グローバルリーダーシップ研究所、2018年。
- ・栄養社『栄養』第18巻第2号、1940年。
- ・市田（岩田）知子「生活改善普及事業の理念と展開」『農業総合研究』第49巻第2号、農林水産省農業総合研究所、1995年。
- ・井上えり子『「文検家事科」の研究 文部省教員検定試験家事科合格者のライフヒストリー』学文社、2009年。
- ・石渡尊子『戦後大学改革と家政学』東京大学出版会、2020年。
- ・岩手大学創立50周年記念誌編集委員会『岩手大学五十年史』、岩手大学、2000年。

16





- 岩手県小学校長会・岩手県中学校長会編・発行『岩手の教育史』1974年。
- 国立栄養研究所『創立50周年記念誌』1973年。
- 文部科学省科学技術・学術審議会人材委員会『関係データ集』（2009年3月公開）  
[https://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/gijyutu/gijyutu10/toushin/\\_icsFiles/afieldfile/2009/05/18/1260184\\_1.pdf](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/gijyutu/gijyutu10/toushin/_icsFiles/afieldfile/2009/05/18/1260184_1.pdf)。
- 文部省学制百年史編集委員会『学制百年史』1972年。  
[https://www.mext.go.jp/b\\_menu/hakusho/html/others/detail/1317552.htm](https://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/others/detail/1317552.htm)
- 無明舎出版編・発行『新聞資料 東北大凶作』1991年。

17



- 並松信久「栄養学の形成と佐伯矩」『京都産業大学論集 社会科学系列』第34号、2017年。
- 仁王百年の歩み編集委員会『仁王百年の歩み』仁王小学校百年記念事業協賛会、1973年。
- 乙訓稔「沢柳政太郎の小学校教師論 一使命・資格・身分・待遇一」『実践女子大学生活科学部紀要』47号、2010年。
- 齋藤慶子『「女教員」と「母性」 一近代日本における〈職業と家庭の両立〉問題』六花出版、2014年。
- 佐々木亨「職業科と家庭科の「統一」 一職業・家庭科の成立をめぐる評価について一」『技術教育学研究』6巻、名古屋大学教育学部技術教育学研究室、1990年。

18



- 清水房・工藤澄子・大森輝「岩手県における高等学校家庭科の戦後史（第3報） 一施設・設備、担当教員、現職教育一」『岩手大学教育学部研究年報』第39巻、1979年。
- 菅原伊保子「食卓のフィールドワーク 「食」の世界に新たな光をあてた鷹嘴テル」『盛岡学』Vol.1（特集 女たちの盛岡）、荒蝦夷、2005年。
- 渡辺一弘「戦後日本の農村における生活改良普及員の活動 一鹿児島県を事例にして一」『教育学研究紀要』中国四国教育学会、第49巻、2003年。
- 渡瀬典子「戦前期における「岩手県小学校連合女教員会」の裁縫実践研究 一生活改善観を中心に一」『日本家庭科教育学会大会・例会・セミナー研究発表要旨集』58号24巻、2015年。

19



- 渡瀬典子「小学校裁縫科における裁縫標本の意義 一「岩手県小学校連合女教員会」の裁縫科実践研究」『日本家庭科教育学会大会・例会・セミナー研究発表要旨集』59巻67号、2016年。
- 山下文男『昭和東北大凶作 一娘身売りと欠食児童』無明舎出版、2001年。
- 吉田睦子・天野信子・柘植美紀子・中村富予「栄養士育成と公衆栄養行政の変遷に見る管理栄養士・栄養士の活動」『生活科学論叢』神戸松蔭女子学院大学学術研究会、2007年。
- 湯川次義『近代日本の女性と大学教育 教育機会開放をめぐる歴史』不二出版、2003年。

20